

留学生インタビューに表れた談話の縦断的研究

——談話の型の習得に関する考察——

齊 藤 真理子*

Longitudinal Research on the “Text Type” in Oral Interviews :

Learning Process of the “Text Type”

Mariko Saito

要 旨 齊藤 (1993) は、Oral Proficiency Interview (OPI) により中級の上と上級の下と判定されたものの談話を分析し、その違いから談話の型の上達について考察した。本研究はその研究を踏まえ、1992年4月と1993年7月に同一の学習者に対して行われたインタビューの談話の型を、接続語句、指示詞、複文、文末表現、間投詞的表現の観点から分析した縦断的な研究である。1年余りをおいて行われたインタビューで得られた談話の型の違いから、その上達を探り、習得の過程について考察をしたものである。その結果、接続語句は、周囲の日本人から取り入れるという形での習得が目立つことが指摘され、また、その取り入れる過程に関する仮説が提案された。指示詞の非現場指示用法¹⁾では、コソの使用がまずできるようになるが、アの運用はかなり難しいことが分かった。接続助詞でつながれる形の複文の場合、まず文末に終助詞的に使われるようになり、その上で後文のある形が表れるものと考えられる。間投詞的表現に関しては、学習者がどのような場面で使うかを認識している場合が多いことが分かった。

1. 会話能力の習得過程について

近年、中間言語研究が脚光を浴びている。これは、自律的学習、学習ストラテジー、というような学習者重視、学習の過程の重視の流れから考えて、当然のことと言えよう。中間言語とは、学習者自身が作り上げる、第一・第二言語双方と異なる独自の言語体系のことであり、学習者の第一言語の影響を受けると同時に、一定の普遍的な道筋をたどって変化する²⁾と考えられている。そして、学習者の犯すエラー³⁾は、その学習者がその時点で持っている中間言語の現れと考えられる。

ピーネマン・ジョンストン (1988) ピーネマン (1989) は、ドイツ語の語順習得を分析し、そこに様な習得順序があることを指摘し、また学習者のその時点での第二言語の段階を飛び越えたものを教授しても、理解はされたとしても運用には結び付かないという仮説を提唱した。これはすべての項目に適用される言うのではなく、様な習得順序を示す発達性項目 (developmental feature) と示さない可変性項目 (variational feature) があるとはしているが、効率的に教える順序が自ずから存在することになり、将来のカリキュラム編成に大きな福音となるはずである。

* 本学講師 日本語教育

日本語の習得順序に関する研究も多く行われつつあり、文法に関しては、小森・坂野(1988)が、インタビューによる集団テストを行い、肯定文は否定文より早く習得され、主題を表す「は」、名詞の接続を示す「と」、「の」の習得が早く、主格を表す「が」の習得は遅れるという結果を報告している。また、土井・吉岡(1992)はビーネマン・ジョンストンのモデルを応用し、英語話者24名を対象にした約15分のインタビューを行い、日本語の助詞の習得過程を分析し、助詞の「は」は「が・を」よりも早く習得されることを報告している。縦断的な研究としては、石田(1991)がフランス国立東洋言語文化研究所の1年生と3年生を対象に行った2～3回の約1分の口頭表現のテストを分析し、音声、文法、構文、などについて日本語習得過程に関する傾向を報告している。また、長友他(1993)が4名の初級日本語学習者の8か月に亘る書き資料、音声資料を分析し、アクセント、語彙、文法、平均文節数、社会言語能力の変化について報告している。

ここで会話能力の習得について考えてみよう。ACTFL-OPI(米国外語教育協会-インタビュー形式の口頭表現能力試験)では、会話能力を評価するための4つの視点(機能・タスク、場面・話題、正確さ、談話の型)を設定し、それぞれの視点から分析的な評価をするために、初級、中級、上級、超級の評価基準を記述している。そのうち談話の型(text type)について初級は単語のみあるいは暗記した文レベル、中級は、自分で文を創造することができるが、不連続な文章のレベル(discrete sentences)、上級は、段落(paragraphs)でまとまったことを話せるレベル、そして超級の談話の型は連段落(extended discourse)で話せるレベルとしている。

これは、つまり談話の型の上達の過程に関する大きな基準といえる。語や句を産出することができるレベルを通して初めて文を創造できるレベルとなり、曲がりなりにも文を創造できるレベルになって初めて段落をもつ談話で話せるレベルとなるという経験的な判断に基づく基準である。これらの上達を形成する要因についての分析が進めば、それらを教室内での活動に取り入れることが可能になり、学習者個々の段階に合わせた効率的な指導をすることができる。

齊藤(1993)は、Oral Proficiency Interview(OPI)で中級の上と上級の下と判定された者のインタビューテープからある程度の長さで抽出された段落を分析し、その談話の型の違いを、接続語句、指示詞、複文、文末表現について考察した。その結果、中級の上では、「だから」「でも」などの易しい接続詞を多用する傾向があり、文脈指示の「ソ」系は使えず、全体の文に占める複文の割合も少なく、文末はバラエティがなく訴えかける力が少ないことが見られた。また、上級の下では、使える接続語句に変化がみられ、特定の指示詞の多用はみられるが、文脈指示の「ソ」系が使えるようになり、複文の割合が増える傾向があり、中級者より文末表現にバラエティがあることなどが指摘された。これらの指摘は同一の学習者の習得過程にも見られることなのであろうか。本稿では、1992年4月と1993年7月に同一の学生に対して行われた二回のインタビューを分析することにより、談話の型の上達の過程について考察する。さらに、水野(1987)もその必要性を述べているように言語機能の中心である談話に関する中間言語のシステムの特性の一端を明らかにすることができればと思う。

2. 方法とその対象について

今回協力してもらったのは、文化女子大学国際文化学科で学ぶ留学生である。彼女たちの日本語の環境は日本人との接触の多寡により大きく異なる。大学では日本語学校と違い、留学生を対象にした日本語の授業は少ない。留学生対象の日本語関連の授業は、1年次2年次にそれぞれ日本語会話(90分授業2コマ/週)と日本語(90分授業2コマ/週)、3年次には選択科目で日本語表現法(90分授業1コマ)と日本語講読(90分授業1コマ)のみであり、その他の科目は他の日本人学生と一緒に受けることになる。そのため日本語の上達は、クラス内で学ぶ日本語だけでなく、日本語のクラス外・学外での日本人との接触によりもたらされるものも大きいと考えられる。

会話能力の上達を測るのに、ACTFL-OPIの談話の型の評価基準を応用し、一まとまりの段落を分析することにした。それは、本学日本文化コースで学ぶ留学生の会話能力を考えてみると、全員OPIでいうところの中級あるいは上級に位置していると思われ、OPIの中級か上級かという判定では、段落ができていくかどうか、一つの大きな目安になるからである。

今回の分析に使用したテープは、1992年4月に当時大学2年生になったばかりの日本文化コースの留学生を対象に一人約15～20分インタビューをしたものと1993年7月にインタビュー協力に同意してくれたもの8名を対象に行ったものである。正式なOPIインタビューではないが、1992年には主に春休みの話題から話を起こし、何かについての一まとまりの段落を抽出することを主眼にインタビューを行った。1993年のインタビューは一人約20分ぐらいかけて、一まとまりの段落を抽出するような形で行った。このように一まとまりの話をさせることにより、単なるおしゃべりでは見ることのできない学習者の限界に迫ることができる。このうち、1回目と同種の段落が得られた6人のテープから、ある程度の長さで抽出された段落をそれぞれ一つずつ選び出し、書き起こしたものを分析対象とした。この6人はすべて中国語話者であった。段落の切れ目は、齊藤(1993)同様、話題と表現された形を手掛かりにして特定した⁴⁾。資料としてあげてあるのはインタビューの一部であるわけだが、その他の部分での特徴も分析する際の参考にしたいと思う。

6名全員に対して、フォローアップ・インタビューを行った。その際、1. 会話が上手になるために何か工夫しているか、2. 分析対象にした1回目、2回目のテープを聞いてもらい、何に気付いたか、3. 変化を指摘し、それが意識的な変化かどうか尋ねる、4. その他、会話の上達について意見を述べてもらう、という手順で行った。

ここで注意しておくべきことは、上級レベルに到達していないものにとっては、一つのことにについて長い段落で述べることは難しいということである。したがって、今回分析したものの中には、一まとまりの段落としてまだ完成していないものや、長い独話を回避しようとしているものなどがある。

3. 談話の型の変化に関する分析

談話の型の変化を以下、1. 接続語句、2. 指示詞、3. 複文、4. 文末表現、そして5. 間投

詞的表現の5つの観点から分析した。

1992年4月のインタビューを便宜的にⅠ期、1993年7月のものをⅡ期とする。資料のAⅠ（学習者Aの1992年のインタビュー）～FⅡ（学習者Fの1993年のインタビュー）を参照してほしい。

3-1 接続語句について

文と文との接続関係を考えるとき、順接、逆接、並列、添加、選択、説明、話題転換などと分類されるが、論理の展開にまず必要となるのは、順接と逆接の表現であると思われる。齊藤（1993）が日本語学習者が初期に習得すると報告している「でも」「だから」は、それぞれその代表例と考えられる。ここでは、順接と逆接をそれぞれどのように表現しているかという観点から分析してみよう。さらに、札幌（1993）も報告しているように、留学生の使用する接続詞表現は限られているわけだが、新しい接続語句を使用し始める時、どのような段階を踏んでいくのだろうか。その習得過程についても考察してみよう。

- ・Aは、Ⅰ期に逆接として使っていた「でも」がなくなり、Ⅰ期には何も使っていなかった順接の部分に「それで」「で」が極端に増えている。

表1 Ⅰ期とⅡ期における談話の型の違い

		A		B		C		D		E		F	
		I	Ⅱ	I	Ⅱ	I	Ⅱ	I	Ⅱ	I	Ⅱ	I	Ⅱ
接続語句	種類	でも 2 だけど 1	だけど 3 それで 4 で 7	あと 1	それで 5 そこで 2 むしろ 2 で 7	しかし 1 そして 2 あと 1	でも 5 そして 1 だから 6 あと 1	でも 3 だから 1 で 1	でも 1 だから 2 で 1	それで 1	でも 1 けれども 1 で 11 だって 1	あと 3 でも 2 でも 1	あと 1
	使用回数	3	14	1	16	4	13	4	4	1	14	5	2
指示詞	種類	そんなに	この	ああいう そういう それ そのとき	あの その こう そのとき あれ	あの それ その そのような この これ	この .	そういう あの	ああいう そういう	ああいう そういう	これ	この その	
	使用回数	1	5	5	8	1	11	1	8	3	2	1	12
複文	複文の割合	7/13 .54	14/24 .58	6/16 .38	13/16 .81	4/9 .44	12/26 .46	7/11 .64	4/7 .57	4/9 .44	7/13 .54	8/17 .47	5/14 .36
	節の数	20	34	14	29	9	27	11	5	8	16	10	12
文末表現	終助詞	～ね、～よ ～よね	～よ、～の	～よ、～ね ～の	～よ、～ね ～よね	—	—		～たん	～よね	～よね	—	～よね
	～のだ	0	8	1	10	1	0	2	1	0	0	0	0
	その他	～から ～けど	～わけよ ～かな ～でしょ	～けれども ～とか ～みたい	～だけど	～かな 体言止め	～かな 体言止め	～かな ～かしら ～ですけど ～から	～かな ～かしら ～みたいな ～だけど ～から	～かな ～から ～とか ～だけど	～し ～とか	～かな ～から	～でしょ ～で…

- Bは、逆接の接続語句は使用しておらず、逆接の関係には、「～けれども」「～けど」などの接続助詞がⅠ期Ⅱ期ともに使われている。順接は、「あと⁵⁾」がなくなり、「それで」「そこで」「で」が使われている。Bの談話でⅡ期に2回使われている「そうすると」に注目してほしい。使う文脈は多少違っているが、とにかく使い始めていることがわかる。
- Cは、順接では、「そして」「あと」だけでなくⅡ期には「だから」が表れている。逆接では、Ⅰ期に多用されていた「しかし」がなくなり、「でも」が使われている。そして、新しく使われ始めた「だから」「でも」の使用が非常に多くなっているのに気がつく。
- Dは、順接では、「だから」が、逆接では、「でも」がⅠ期Ⅱ期とも使われている。新しく使われ始めたものに「で」がある。
- Eは、順接では、「それで」が使われなくなり、その省略形と思われる「で」がⅡ期に多用されているのが目立つ。さらに「だって」が表れている。逆接では、「でも」「けれども」が使われている。
- Fは、Ⅰ期Ⅱ期とも順接では「あと」を、逆接では「でも」を使っており、接続語句に関しての変化は認められない。

表1にその結果がまとめてあるが、F以外は、レポートリーが増えてるのが分かる。これらの変化について尋ねてみると、かなり意識的に変化させた者、意識的ではないが、日本人の真似をしているうちにその話し方の特徴がうつったのではないと思われる者がいる。Aは、「でも」を使わなくなったことについて、日本人の友人に、あまり使うと良くない、女性は可愛らしい言い方をしないとだめだと言われたと述べている。そのためAはその日本人の女性の話し方を真似するようにし、その結果彼女がよく使う「それで」「で」などが増えたそう。Cの場合、「だから」が増えたことは意識していないが、「しかし」を「でも」に置き換えるようにしたのは意識的だったそう。これは、会話に「しかし」を使うのはおかしいという教師のコメントを忠実にとり入れたものだった。変えるのに約半年かかったということである。

Bの場合は、意識的ではないが、バイト先の日本人の女の子が使っているのだろうということだった。Bは、会話の力を伸ばすためにしていることとして、バイト先の店の女の子の使う日本語を真似するという事を挙げている。Dは接続語としての「で」の使用については意識していなかったが、中止法としての「で」に関しては、どういうときに使うか良く分からないが、日本人と話すとき「～で、…」とよく聞くので、何となく最後に「で」を入れてしまう、最後に何を入れるかわからないとき「～で…」と言ってしまうということであった。Eは、「で」をよく使うことについて、自分では意識していないが、日本の若い人がよく使っているのかもしれないということであった。Eもバイト先で日本人との接触がある。

ところで、文と文との関係を示すものについての分析は接続語句としたものだけでは不十分である。「～けど」、「～だけど」などの接続助詞、動詞の「て形」などで複文を作り、接続語句を使わずに論理の展開をしていることが多い。この接続助詞の使われ方を注意してみると、「～だけど」で接続される場合の接続のエラーがかなりあるのに気づく。Aには、「正直すぎるかもしれないだけど」「ためてないだけど」のような動詞、い形容詞の接続のエラーがみられ、Cには「待ちたか

っただけど…」「小さいけれども…」のようなエラーがある。またDは、「日本より低いなんですけど…」, Eは「見なかったんけど」「なってるんけれども」など「～のだ」との接続でのエラーも散見される。

これらの接続の誤用とフォローアップインタビューの内容から、次のような習得の過程が考えられるのではないだろうか。1. Bの「そうすると」やDの「～で…」のように、聞き覚えたものを良く分からずに使ってみる。2. 正しい文脈だけではないが、多用が起きる。これは、表1の波線をつけて示した新しく使われ始めたものが、口癖のように頻繁に使われている場合が多いことからの推測である。3. 上述した「～けど」の例のように、形は（接続の変化がある場合）正しくないが、正しい文脈で使えるようになる。4. 正しく使えるようになり、定着し、使用数も減る。

少ない例を分析しての推量にすぎないが、これは中間言語の分野で考えられているように、学習者なりの論理と規則性で体系を築き上げていく絶えず試行している学習者像、受身的な存在ではなく主体的で能動的な学習者像とも重なる。

3-2 指示詞

次に指示詞についてみてみよう。齊藤(1993)は、文脈指示の「ソ」が正確に使用できることが、OPIでの中級と上級の違いを測る一つの目安になると指摘したが、指示詞の習得過程にはどのような傾向がみられるのだろうか。

- Aは、主要人物を示すのに、Ⅰ期には指示詞を使っていないが、Ⅱ期には「この」を使うようになっている。
- Bは、Ⅰ期に見られた誤用の「ああいう」がなくなり、「あの」「その」が使われている。「あの」の2例は誤用である。
- Cは、Ⅰ期に一度「あの」を使用し、それも誤用だったが、Ⅱ期には、「それ」、「その」、「あれ」、「この」、「そのような」とレパートリーが増えている。類にあるこぶをさすのに、「その」、「この」の間で揺れているが、この場合、視点の違いであって、どちらも日本語としては許容される。
- Dは、「あの」と「そういう」を使っているが、2例ある「あの」は、どちらも誤用である。「そういう」も口癖的に使われており、半分ぐらいは、許容度の低いものである。
- Eは、Ⅰ期Ⅱ期とも「ああいう」「そういう」を使っており、その使い方にはゆれがみられる。口癖のように使われているが、「ああいう」はこの場合誤用である。
- Fは、「この」「その」の使用が格段に多くなっている。それも正用である。接続詞では変化のなかったFであるが、この指示詞の変化は注目に値する。

以上から、あまり変化のなかったE以外は、使用回数が多くなり、また種類も増えているのが分かる。また、C・Eのように、使用が定まっていない例が見られるほか、Aの使用に誤用が多いことが指摘できる。指示詞の変化についてはF以外は意識していなかった。Fは指示詞の使用が多くなったことについて、授業で指示詞について多く扱われたからではないかと述べている。

迫田(1992)は、初級・中級・上級のクラスにいる日本語学習者の「コ・ソ・ア」の使用について調べ、中級レベル学習者にコソア選択の揺れている部分がみられたことを、そして学習レベルが

上がるにしたがって、アに関しては、顕著な傾向は見られなかったが、コ・ソに関しては非現場指示用法の運用能力が高くなることを報告している。非現場指示用法の運用能力が高くなり、特にソが上級⁶⁾で急増したという結果は齊藤（1993）の指摘と重なり、興味深い。また、日本語学習者にとって、非現場指示用法のソとアの使い分けは難しく、特にアの用法の習得が困難であるという迫田の結果も今回の分析結果は支持している。コソアの非現場指示の習得については、まずコとソが正確に使えるようになり、アの習得は遅れるということが言えよう。コの非現場指示は数的に少ないので、齊藤（1993）ではソの正確な使用が目立ったということではないだろうか。

3-3 複文

複文については、ある程度使えるようになることが大切ではあるが、あまり複文ばかりというのも話し言葉としては不自然である⁷⁾。複文の割合について比較してみよう。

- B一人が非常に多くなっている
- DとFは、複文の割合が減少している。

BについてはB Iのインタビューでは、ストーリーを物語るのではなく、話の内容をまとめてしまったためB Iには少なく、B IIで増えたと思われるかもしれないが、意見を述べた談話B II'でも複文は非常に多い。フォローアップインタビューでBは、作文を書くときにも文が長いと言われるが、短いと文が成立していないと感じること、母語でも文は長く、それは、幼い頃文字をたくさん使って日記を書くように指導されていたことによるのではないかと述べている。

DとFで複文の割合が減少していることに関して、複文の種類について少し詳しく見てみよう。そうすると、複文の量は減少しているが、質は変化していることに気づく。例えばF Iでは、文の終わりに「～から」が使われている複文が大半を占めているのに対し、F IIでは、「て形」「～から」「～けど」などを使い後文もある複文になっているのが分かる。また、D Iでは、「～けど」で文が終わっているものがD IIになると後文もある形になっている。少ない例からの推量ではあるが、これは複文構造がより難易度の高いものになったことを意味してはいないだろうか。

文と文を上手に長くつなげていくときに複文は欠かせないものである。ここで談話が複雑になっていく過程を考えると、意味の習得はもっと前に成されているのであろうが、会話で応用される場合、まず、文の終わりに「～けど」や「～から」の後半のない複文が現われ、その後で、後半のある複文が使えるようになってくるのではないだろうか。つまり、「XからY」という文型の後文省略として「Xから…。」を使用するのではなく、「Xから…。」で応用することを積み上げた後に長い文「XからY」に移行するのではないだろうか。そうであれば、「～から…。」や「～けど…。」が十分に運用できるようになってから後文のある形を紹介するのが、自然な習得の順序に適っているということになる。

3-4 文末表現

終助詞を含む文末表現の多様さを見てみよう。このとき、北條（1989）が複文文型の中で、終助詞的役割を果たしているとして述べている「～から」「～けど」「～けれども」「～し」も含めて見てみよう。

- Aは、多種の文末表現を使いこなしている。文末に「～よ」「～の」が多くなっている。

- Bも多種の文末表現を使いこなしている。Ⅱ期には「～よ」がなくなり、「～よね」が使われるようになっていく。また「～の」もなくなっている。Ⅰ期に普通体がいくつかあったのが、Ⅱ期にはなくなり、全体的に丁寧な話し方になっている。
- Cは、文末のバリエーションは少ない。また、「です・ます体」と普通体の混在が目立つ。
- Dは、文末のバリエーションは多いが、「～したん」というエラーがある。また、B同様「です・ます体」と普通体の混在が目立つ。
- Eは、「～よね」が口癖のように使われており、誤用の場合が多い。
- Fは、複文の部分でも述べたが、Ⅰ期には「～から」が終助詞的に使われている例がとて多かったが、Ⅱ期には後半部まで述べ長い文になっているのが見受けられる。Fの談話にも「です・ます体」と普通体が混在している。

文末表現では、皆3年以上と在日期間が長いからかなり多様なものが見受けられる。その中で、エラーが目立つものは、「～のだ」、終助詞、文体の統一である。「～のだ」では、Dの文末に見られた「～したん」というエラーのほかに、Aに「難しいなんです」「契約するなんです」、Eに「～してるんけれども」「～してたんから」などがあり、接続が難しいようだ。終助詞については、「～よね」は誤用も含めかなり使われているが、「～ね」「～よ」の使い分けは難しいようである。文体の不統一は、かなり目立ち、上の段階に進むときの大きな障害のようである。Bの話し方に不統一がなくなったことについては、Bがバイト先の店で客の電話を受ける仕事もしていることに関係がありそうである。

3-5 その他間投詞的表現について

話し言葉の特徴の中で、聞いてすぐに気づき、また真似をしやすいのは、間投詞的表現ではないだろうか。半澤（1990）も話し言葉の特徴の第一に「えー」「なんというんでしょうか」「あのお」「ね」などの文の初めや途中にはさまれる間投詞的表現について挙げている。今回の分析でも、個々人の話し方の特徴として耳に残ったので、少し触れておこう。

- Aは、非常に多かった「アノ」が減っている。これについてフォローアップ・インタビューで、うまく言えないときにそれを隠すために「アノ」を使うこと、だんだん上手になって、自然に「アノ」を使わなくてすむようになったことを述べている。Aでは、他に文節の間に入る「ネ」「ホラ」がかなり気になる。
- Bは「アノ」を使うようになった。これについて、授業で、使い方を学んだためと述べている。
- Cは「ウーン」という女の子らしくない表現が消えているが、本人の自覚はない。
- Dは「エー」「ソー」がなくなり、「アノ」「ソノ」が増えている。これについては、バイトのとき日本人に日本人はそういう風に言わないと教えてもらったこと、しかし、意識的に言わないようにしようとは思わなかったこと、台湾では次に何を話すか分からないとき「エー」とか「アー」とかよく言うので、Ⅰ期には台湾の習慣が出ていたのかもしれないことを述べている。
- Eは「なんか」「ソー」がなくなっている。これは、あまりきれいな言葉ではないと思っているためかもしれないと語っている。Ⅱ期に「たとえば」が多く使われたことについては、言いたいことがあって、それを簡単に説明したいとき使うと言っている。

・Fは、「なんか」と「たとえば」が増えている。これについては自覚はないようである。

フォローアップ・インタビューで聞いてみると、使用している言語形式についてメタ言語的な認識をしているものが多いことが分かる。学習者達の日本人とのコミュニケーションを考えると、そこには圧倒的な会話力の差と、学習者自身の言いたい内容と言語形式の差という二つのアンバランス⁸⁾がある。それを乗り越えるための言語技術—特に上記のような間投詞的表現—を尾崎（1981）も述べているように意識的に指導する必要がある。土岐・越前谷（1988）はいいよども、あいづちなどの指導のためにインタビュー番組などをもとにした教材を作成しその効果について報告しているが、このような教材が必要である。また、その時、それらの間投詞的表現がどのような印象を母語話者に与えるかという指導も忘れてはならない。

4. 結果のまとめと日本語教育への応用

限られた談話例の分析からではあるが、次のことが示唆されるのではないだろうか。

1. 接続語句は、文頭にあることもあり、学習者にとってかなり他の日本人から取り入れやすいものと言えるだろう。意識的に変化させようとしたもの、あまり意識的ではないが、漠然と真似をしていて使用するようになったものが目立つ。それだけに、日本人の標準的な話し方を分析し、使いやすい接続語句を洗い出し、適切な接続語句を学習者に導入していく必要がある。その際、「でも」などのように多用されると、不快な印象を与える可能性のある語句の場合、日本人の会話ではどの位、どの様な場面で使われているかという調査や、「あと」のように接続語句としては普通扱われていないが、日本人の会話では接続語的に使われている表現なども明らかにする必要がある。

さらに、接続助詞のエラーやフォローアップ・インタビューの内容から、一つの文型が習得される場合の次のような仮説が提案された。1. 聞き覚えたものを何となく使ってみる。2. 文脈として適切でない場合も含め、多用が起きる。3. 接続の仕方など正しくないが、正しい文脈で使えるようになる。4. 正しく使えるようになり、使用数も減少する。これが他の文型にも当てはまるかどうかは今後の検証が必要であるが、豊富な正しい文脈を与えることにより試行錯誤の過程を省く方向でクラスでの練習を考えることができる。ここで、疑問なのは、3. から4. の段階にいくときに、間違えた形で多用していたものが容易に正しくなるのかということである。Cが意識的に「しかし」を「でも」に置き換えるのに約半年かかっている。かなりの努力をしないと正しい文脈で使えるようにはなっても、間違えた接続形のまま固まってしまうのではないだろうか。形に混乱を起こすことなく多用が起きるようにはできないのだろうか。そのためにはどうすればよいのか。さらなる研究が必要である。

2. 指示詞に関しては、非現場指示の運用で、ソソの使用が、まず出来るようになることが、そして、アの正確な運用はかなり難しいことが分かった。日本語教育では、ソとアの違いを説明し、同時に提出する場合が多いが、非現場指示としてよく使われるソをまず多用できるようにし、それから、アの定着を図るようにするのが望ましいと思われる。

3. 今回分析した談話では、名詞修飾がほとんどなく、接続助詞でつながれる形の複文が多かった。接続助詞でつながれる形の複文の場合、まず、接続助詞が文末に終助詞的に現れるようにな

り、次に後文もある長い文になるようである。もちろんそれぞれの接続助詞の意味を導入するためには前文と後文の意味関係を知らせることが必要であるが、運用では、文末に終助詞的に使われる形を多用させるようにし、次のステップとして、後文のある形が運用できるようにすることが望ましい。

4. 文末表現では、顕著な変化の傾向は見られなかったが、全体的に、「～のだ」、終助詞、文体の統一が会話が洗練されていく過程で難関のようである。「～のだ」については、使用場面よりも、接続の活用に難点がありそうだ。学習者にその誤りを意識させ、変える必要性を強く感じさせるようにすると良いと思われる。終助詞では、「～よね」が誤用も含めかなり使われており、「～よ」と「～ね」の使い分けはなかなか難しいようだ。その習得に関する調査が必要である。文体の統一は、作文でも完全にできないものである。Eは、一緒に使わないのは知っているが、話すときに忘れて使ってしまうと語っている。女子大生の場合、周囲の日本人女子大生の話し方の影響は無視できない。ロールプレイなど積極的に取り入れ、場面に合わせた会話ができるように指導することが必要であろう。

5. 間投詞的表現では、学習者の中にはメタ言語的な認識をしている者もいる。どういう場面で使い、さらにどういう印象を日本人に与えるかという正しい理解を深めるような指導を忘れてはならない。

5. 終 り に

談話の型の上達について分析し、その習得過程を考察したわけだが、接続語句、指示詞、複文、文末表現、間投詞的表現などの様々な要素が含まれ、それぞれの要素が、広がりのある研究分野を提供しているだけに、今後それぞれの分野での検証が必要である。

また、今回、フォローアップ・インタビューを行ったことで、周囲に真似をする対象となる日本人がいるかどうかということが、特に会話の習得では大きいことが当然のことではあるが、改めて分かった。日本で学んでいる留学生たちの場合、周囲の日本人を活用することができるか否かということは、非常に大きな事である。日本語を話す機会を作るためにバイトをするということはよく聞くことだが、アルバイトという場面に頼るだけでなく、大学での日本語教育でも、周囲の日本人を大きく取り入れていく方向が模索されるべきであろう。

さらに、Fのようにあまり日本人と接する機会のない学習者にとっては、クラスの授業がかなりの情報源となる。日本で学んでいる状況を生かし、テレビなどの日本語を効果的に取り入れるためのきっかけになるような授業を工夫していきたい。

今回、学習者がかなり意識的に日本語を運用していることが分かったので、より一層意識化を進める方向での授業も考えていきたい。

註

- 1) 齊藤（1993）が文脈指示と一つに括っていたものを迫田（1992）は、非現場指示とし、4種の文脈指示用法に加え、観念指示、単純照応、絶対指示に分析している。

- 2) 第8回日本語教育学会集中研修会における土井利幸氏の講義による。
- 3) 学習者の誤りの中の組織的なものを言う。
- 4) C IIの段落は延々と続いてしまったので、途中省略したものを分析対象とした。F Iの段落はどれも長く続かなかったため、二種の話題のものを分析対象とした。
- 5) 「そのあと」、「～あと（で）」は接続の言葉として扱われているが、ここでは、「あと」も接続語句と見なし分析する。
- 6) OPI上級ではなく、単に上級レベルのクラスに在籍することを意味する。
- 7) 齊藤（1993）の日本人の例では、複文の割合は、.35であった。
- 8) 第8回日本語教育学会集中研修会における平高史也氏の講義による。

参 考 文 献

- 石田敏子 1991 「フランス話者の日本語習得過程」『日本語教育』75号
- 伊豆原英子・嶽 逸子 1991 「中・上級学習者の話し言葉（独話）の分析と考察—情報伝達を通して—」『日本語教育』77号
- 尾崎明人 1981 「上級日本語学習者の伝達能力について」『日本語教育』45号
- 久保田美子・大島弥生 1992 「日本語初級学習者の習得過程縦断調査—格助詞「を」「に」「で」「へ」接続表現等についての考察」『日本語教育学会秋季大会予稿集』
- 小森早江子・坂野永理 1988 「集団テストによる初級文法の習得について」『日本語教育』65号
- 齊藤真理子 1993 「The Oral Proficiency Interview に表れた談話の分析—中級と上級の談話の型の違いについて」『文化女子大学紀要 人文・社会科学研究』創刊号
- 佐久間まゆみ 1990 「接続表現(1)(2)」『ケーススタディ 日本語の文章・談話』桜楓社
- 迫田久美子 1992 「話し言葉におけるコソアの中間言語研究」『平成4年度日本語教育学会春期大会発表要旨』
- 渋谷勝己 1988 「中間言語研究の現状」『日本語教育』64号
- 志村明彦 1989 「日本語の Foreigner Talk と日本語教育」『日本語教育』68号
- 谷口すみ子 1987 「学習者のコミュニケーション能力をいかに評価するか—オーラルインタビューにおけるコミュニケーションストラテジーの使用について」『紀要』10号 アメリカ・カナダ11大学連合日本研究センター
- 谷口すみ子 1992 「日本語口頭能力試験報告書—調査研究のための尺度としての口頭能力試験の可能性—」『日本語口頭運用能力の評価に関する考察』日本語教育学会
- 土井利幸・佐々木嘉則 1987 「外国語習得の自然な順序に基づいた外国語指導を目指して—PJ モデルの紹介」『英語教育』6月号, 7月号, 8月号
- 土井利幸・吉岡 薫 1990 「助詞の習得における言語運用上の制約—ビーネマン・ジョンストンモデルの日本語習得研究への応用」『平成2年度日本語教育学会大会発表要旨』
- 土岐 哲・越前谷明子 1988 「日本語の話しことば教育について—中・上級段階に見られる談話能力の変化—」『言語文化論集』第Ⅸ巻第2号 名古屋大学総合言語センター
- 長友和彦他 1993 「縦断的第2言語習得研究：初級日本語学習者の中間言語」『日本語教育学会春期大会予稿集』
- 札野寛子 1993 「外国人留学生の日本語談話レベルでの誤用分析」『日本語教育学会春期大会予稿集』
- 北條淳子 1989 「複文文型」『談話の研究と教育Ⅱ』（日本語教育指導参考書15）国立国語研究所
- 水野晴光 1987 「日本語の中間言語分析」『日本語教育』62号

BUCK, Kathryn ed. 1989 "The ACTFL O.P.I. Tester Training Manual" ACTFL

GIVON, Talmy 1979 "From Discourse to Syntax: Grammar as a Processing Strategy", *Syntax and Semantics*, Vol. 12: Discourse and Syntax

PIENEMANN, Manfred 1989 “Is Language Teachable? Psycholinguistic Experiments and Hypotheses” *Applied Linguistics*, Vol. 10, No. 1

PIENEMANN, Manfred, JOHNSTON, Maldolm & BRINDLEY, Geoff 1988 “Constructing an Acquisition-based Procedure for Second Language Assessment”, *Studies in Second Language Acquisition*, Vol. 10

資料

- 1) 文の切れ目と見なされる箇所は/で示した。
- 2) その段落の話題，テストの発話の内容は（ ）に示した。
- 3) 接続語句，指示詞は で示した。
- 4) 複文と見なされる箇所を示すために，節の述語を で示した。
- 5) 間投詞的表現の「アノ」などはカタカナで示した。

A I

(印象に残っている映画)

アノ中国でアノ，中国でねあまり有名じゃないですけど，日本で，去年はね，人気あったのコウさんの作品は，アノ北京最後の夢追い人という映画はね，とても見たらとても感動しました。/(どんな?) 普通の映画じゃないですよ。/アノ…何て言うかな，例えばアノニュースに出てね，でもいろいろな人の話を聞いたり…/アノ…今度先生に紹介するから…/

(どうして感動したのか) そうですね。/いくらホラアノ，日本人はね，よく例えば中国の経済力ね，アノ弱いですよ。/だけど，人間のアノ豊かさというのは経済的にじゃなくて，心の豊かさじゃ…アノ表現しましたから，すごく感動しました。/

(どんな風に心の豊かさを表現していたのか) え，アノ，4人をね，4人のこと表現しました。/一人はアノ絵書くの人でね，一人は文学者と一人はアノ監督でね，一人はアノカメラの…4人の事。/4人はすごくまあ，生活はね，小さな部屋に住んでね，そんなにいい生活してないですけど，でも自分の理想はね，一生懸命努力して，最後にね，4人とも，本当の事ですよ，4人でも，一人はフランスに行って，フランス有名なアノカメラと関係あるの会社に入って，サイロはね，(サイロ?) ウン，彼のサイロをフランスに(サイロって何) サイロ，サイロ，ノは能力のノ，/一人は文学者でアメリカに行ってナンカ有名な文学賞をもらいました。/一人は画家で，まだ一生懸命頑張っているんですけどね…。/いろいろな面でね，4人の生活表現しました。/

A II

(最近読んだ小説)

きょうだいのことなんです。/双子のこと。/双子の人生のことについての本なんですけれども，お姉さんはすごくしっかりしてて，だけど妹のほうはねわがままで男にだまされたって言うか，それで結局はなくなって，マ，死んじゃって，自殺したんですよ。/妹，ホラ，自殺したときのお姉さんの気持ち読んだらね，泣いちゃったの…/

(どうして，自殺したのか) 複雑のことですよ。…/そうですね。/妹は好きになった男性は義理のお姉さんの彼氏だったんですよ。/妹，すごくわがままでね，気が強いでしょ。/で，とっちゃったの。/お姉さんの彼氏をね，とったんだけど，お姉さんもね，この義理のお姉さんも気が強いから，取ってもいいわって言ったの。/だけど，アノ婚約発表したすぐはまたバリから香港まで帰って，この男性をね，奪うためにいろいろしたんですよ。/結局は，マ，この男性はお姉さんと小さいころからの友達だったので，お姉さんの方へ戻るわけよ。/それで妹は婚約したんだけど，まだ結婚してません。/結婚してないんだけど，妊娠してました。/それで二人ヨーロッパ旅行して (二人ってだれ) 妹と彼氏はね，結婚する前に，ヨーロッパ旅行して，ヨーロッパで喧嘩して，で，男の人，男性はね，香港帰っちゃったんですよ，…アノこの妹を捨ててね。/で，妹は，流産して，一か月ぐらい行方不明になって，本当のお姉さんはね，すごく心配して，で，帰ってきたら，もう普通の

人じゃない。/マ、ちょっとおかしくなりました。/自分のお姉さんとお母さんと自分のことだけ知っています。/他のこと全部忘れちゃったかな。/ウンそれで一か月間ぐらい、帰ってきて一か月半ぐらいたった時に、ベランダから落ちちゃってなくなっただです。/結局はこの男性も頭がおかしくなっただです。/で、お姉さんはもう、自分がね、何て言うか失敗者じゃなかったから…だけど男性はね、心がここにいないんですよ。/で、お姉さんは結局、またバりに戻って、で、男性は頭がおかしくなりました。/本を読めばもっとおもしろかったんだけれども、うまく説明できないです。/

B I

(見ているテレビ番組)

普通のドラマとかマ、ニュースもたまには見てるけどね、ほとんど、サスペ…なんというかな、土曜スペシャルとか連続ドラマ…/ (連続ドラマ何か見ているか) ええ、見えます。/もういまおわったんだけど、また新しいの始まった。/月曜日から金曜日まで、9時からずっとあるんじゃないですか。/それ、全部見てるんです。/ (何か好きなのは) 今はね、まだいっこしか始まってないの。/ (終わったものでも) え、結構ありますよ。/ 愛という名の下とか。/若い人の、ナンカ大学出て、社会人になってとかああいうのが多い。/けっこうおもしろかった。/ (内容は) マ、一応、青春時代の間、いろいろ悩みとか、会社であったこととかそういう、あと、男女関係とかね。/

(具体的に内容を) …内容ですか。/どういう風に説明したらいいか。/…友情のほうが一番大事みたい。/

(学生のときの友情と社会人になってからの友情) 私もそう思うんですけども、やっぱり学校で一番時間が、一緒にいる時間が長いから、そのときの友情というか一番本当の友情じゃないかなとか思うんですけども…。/社会人になると、こう、自分のこととか、仕事のこととか多いと思いますけど、友達とかああいう、チャンスとか、あれ、機会が少ないじゃないかと思います。/

B II

(最近見た映画)

あ、それが、アノー、男女二人が高校時代で付き合って、ゴールデンまで行ったんですよ。/ (えっ?) 結婚するまで行ったんですよ。/それで、すごく仲よく暮らしていたんですけども、ある日二人で、アノー、マンションを買おうと計画をして、そのとき丁度アメリカバブルがあって、その男の人はずっと建設のアノ会社で働いてたんです。/と言うか、アン何というかな、そこで、やめさされて、首されて、それで貧乏になったんですよ。/そうすると、男の人と女の人…女の子が日本で言う賭け事みたいなバチンコやさんみたいところで、かけてみようって言って一晩で結構儲かってたんですね。/で、そこで、あの女の子が洋服やさんでこうサービスのチョコレートを配ったんですよ。/それで盗んだなんです、女の子は。/そのときは一人億万長者がみて、ニコッと笑ってたんです。/女の子を気にいって、それで旦那さんに「一晩を費してください。そうすると百万ドルをあげます。」/その契約をして、百万円を男の人は貰って、旦那さん貰ってたんだけど、女の子は、奥さんが、億万長者についていったんですよ。/で、帰って来て、旦那さんは一応気にしないって言ってましたけど、で、結構気にしてたみたいです。/ちょっと喧嘩をしたりとかして、で、女の子が最後、最後っていうか、あれ、自分の旦那さんと別れようと決心して億万長者のところへ行っただです。/それで、やっぱりいろいろあって、で、男の/何もなかったんです。/本当は何もなかったんですけど、そのいろいろあれがあって、最後、やっぱり二人仲直りした言う。/で、お金もいらないから、あの百万ドルか、カバのナンカ寄付金みたいなのがありまして、動物を受するようって言うかナンカ書いてありまして、その百万ドルを元の旦那さんは出して、で、女の子は旦那さんの元へ戻ったってというストーリーなんだけど…/

B II'

(結婚するより、一人暮らししたほうが良いと言う人が増えているが)

え、それはちょっと良くないと思います。/だって、女の人で、まあ、何て言うかな、実力がすごくある人

が、それは別なんだけれども、で、皆そう感じがするとあんまり良くないと思うんですけれども。/女の人ってやっぱり結婚したほうが一番幸せと思います。/だって、女の人ってさ、あんまり表を、何といひかな、出て、あれ、あんまり好きじゃないです。/やっぱり後ろで自分の旦那さん支えたほうが、一番いいと思う。/自然だと思ひます。/だって、そういう、何ていひかな、結婚しないですつといたっていつか絶対自分もネ、寂しいなって思ひうときがくると思ひますから。/そのときなると遅いと思ひます。/

C I

(読んでいる漫画の内容)

ウーン、3兄弟の物語。/とっても不思議だと思ひんから、読んでいます。/あの内容は大体…両親は…お父さんの方はイギリス人なんですけれども、母の…お母さんの方は日本人。/そして、結婚して、家族は皆反対にして、そして結婚してから家族とヌギ…抜いて、あのあとは3人のきょうだいウマッてまで、両親は死んじやった。/しかし、お父さんの方はナンカダイショーが…もらったことあるんで、…/(ナニ?)何のダイショー忘れちゃった。/例えばノーベルかな。/貰ったことがありますから、3人の兄弟はお金持ちになつて、そして、3人の兄弟に対していろいろなことがついています。/(ツイティマス?)…述べています。/

C II

(知っている昔話)

ある昔昔、とてもいい兄弟がいました。/アノお兄さんはこの左のこの辺はナンカ肉のようなものがあります。/でも、結構とても大きい。/ア、肉があります。/そして弟さんは、この右の辺は、…(コトバディッて)わからない。/でも、肉の…肉だけれどもそれは普通の肉、湿疹とかとても小さいけれども、その湿疹はとても大きい。/だから、アノお兄さんはこの物がアノ左…お兄さんはその湿疹があつても毎日楽しくしています。/例えばア、この物があつても仕事をやることもできるしとか生活もできる。/だから、これが邪魔と思ひっているんだけれども、例えば、寝るときは結構邪魔ですけれども、楽しくしています。/でも、弟の方は、ア、この物イヤとか思ひっているし…/ンあまり仕事をしていない。/毎日は何かゴロゴロしています。/ア、先に言ひます。/この二人の兄弟は結構お婆さんとお爺さん…ア、この二人は二人ともお爺さん。/だから、奥さんがいます。/だからお婆さんとお婆さん両方とも持っています。/あとある日は左のお爺さんは朝家を出て、エダ?エダ?木の枝を切り取りにいきました。/でも、夜遅くなつたから、アノ雷とか大雷があつてとか、道を迷っていました。/だから、帰ることができなかったから、お爺さんはア、一応今日は山に泊まりましようと思ひて、アノ、1つの穴?山とコト?熊住んでるような大きな穴に泊まっていました。/でも、夜寝てるときは、突然何かうるさくの、大騒ぎの音が聞きました。/うるさい音かな。/うるさい音を聞きました。/その時は、お爺さんはえーっ変なと思ひて、うるさいと思ひて、何かあるかなと思ひて目を覚めて、アちょっと、アノ穴の奥の光が見えてきました。/だから何ですかと思ひて、奥に行きました。/入りました。/

…途中省略…

結局は弟さん、取りに行きたかつたんだけど、二つは付いたままに帰りました。/

D I

(最近の中台関係について)

エート、同じ中国人だから、エー、正式の関係全然あわなかった。/でも、両方の性格、今ちょっと違ひますから、ソー、貿易の人は台湾帰ったときにニュースに聞いて、エート、台湾人は中国へ行つた。/だから、エー、家族は3人かなあ、全部死亡した。/どうしたの。/中国の方は自然死亡に答えた。/でも、私たちはそうと思ひなかつた。/でも、今まではどうなるかしら。/分からないですけど。/この問題はちょっと大きいと思ひんんですけど。/人の命から、大切なものですから。/ちょっと心配と思ひんんです。/

D II

(最近見た映画内容)

内容は、アノ、エート、ウィットニー・ヒューストン (WH) のソノ、何というかしら、そういうファンたちアノ中に一人は、ア、アノ、とても WH を好き—大好きでア、でも、アノ、反対にソノ脅迫書を WH に出したんです。/アノ、なんとか脅迫みたいなもの。/だから WH のマネージャーかなあ、アノ、WH のボディガード (BG) を探したん。/だからアノ名前忘れちゃったけど、そういう BG を WH をアノ、そういうガードしたん。/アノソノアノ、そういうガードは前はアメリカの大統領のガードしたことあるから結構格好良い、ハンサムで、アノちょっと最後ラブストーリーみたい。/そういうストーリーを最後まで、で、最後はア、もうあの BG も WH のガードにやめたけど、でも、最後あの犯人をみつかったかなあ。/そう、大体そういうこと、whole story だから。/

E I

(よく見るドラマについて)

アノ、ナンカ、ソー夜はほとんどアルバイトしてるから。/ドラマが2回やるんですよ。/それで、アノ、午後、春休み時は見たのはナンカ、ソー、アノ101回目のプロポーズとかあいうふうのドラマがもう好きだけど…/

(どんなドラマ?)

ソー—そうですね。/やっぱり何か感情…全部で見なかったんけど、だんだん時間があつたら見るけれども、ナンカすごくアノ、ナンカ感情…アノ愛情がアノとてもナンカ強いかなあ。/ウン、好きの人はずっと好きかナンカ。/ウン、そうですね/アノ、今の若者はアノいろいろな人付き合ってるとかそういう点アノちょっと違うとかやっぱりそういう感覚です。/ウン。(笑い) /

E II

(知っている物語)

そうですね。/たとえばね、ウン、台湾アノ、景色…アノ台湾の春夏秋冬があるんけれども、雪が降らないけれども、でも、あいう物語、あるんですよ。/で、たとえばね、アノ、ハルビンかもしれないけれども、で、真冬ときが全部コリなっちゃうです。/川も、アノ、全部、アノ、川全部氷になっちゃうて、で、けっこうアノ、ある家の、アノ、たとえばね、私のお母さんが病気になるんけれども、アノお母さんが病気になるんけれども、今一番食べたいのはナンカ魚って言うてるんですよ。/けれども今の時期が魚なんか全然取れないし…/だって、湖全部海になるんですよ。/で、結局私は、アノ、海の、アノ、湖の真ん中に行つて、自分の洋服ぬいじゃつて、で、身体が、体温があるんですよ。/で、アノ、上に寝てるんですよ。/で、アノ、結局氷が解けちゃう。/とけちゃうから、で、下がまた水があるんじゃない。/魚があるん…いるんから、で、氷解けて、で、中から魚出て、で、喜んで持てかえつて、アノ、母に差し上げるとか。/そういうあるん…あったんですよ。/ウン。/

F I

(旅行について)

すごく楽しかったです。/ (何か印象に残ってること) アノ、向こうは泥棒…泥棒がいっぱい。(笑い) /皆アノ、ハンドバックは前に持って、きちんとアノしてる。/ (取られそうになったの) はい。/アノ、アノ、私のメンバーは一人の男はアノ、トイレ行くときはアノ中国の小さな男子はアノ後から、コレ、(ジェスチャー) お金を取りたいかなの感じかな。/ (取られたの) いいえ。/でも気がつきましたから。/

(よく行く教会について)

国際教会です。/アノ、南アジアの人は結構いますから。/あと、アメリカ人とイギリス人と。/ (日本語で話すのか) アノ先生のメッセージはアノ、時々日本語で、中国語を翻訳します。/あと、もし先生は中国人の場合

は、日本語を使ってくれます。/（前からクリスチャンか）いいえ。/でも、アノちょっとクリス…イギリス…
なに…イギリス教…アノこれ聖書のことを興味を持っているから。/あと、アノ向こうは日本語も練習ができ
ますから。/バイトがやっていないから。/ほとんど日本語話すの機会も少ないから。/

F II

そうですねえ。/ナンカ…幸せというのは、お金を買えないのものなんです。/その映画はアノ男女の関係に
みせてる。/（それで？）第三者はこの男と女ですよね。/第三者はこの女は好きだから、1千万ドルに出し
て、この女の子といちばんに過ごしたいというアノ映画で…/でも、この二人はお金がないから、第三者のア
ノ、ナンカ条件…条件じゃない…受けて、あと、例えばカミが…何かカガミが、鏡が割られると一度はアノき
れいになれないという意味で…/（それで？）その意味で、鏡は割れるとウンかなり傷があるですよ。/その
傷がアノいつも残っている。/二人の間にナンカ…ン…傷…/（二人は幸せじゃなくなったのか）一度幸せじ
ゃなかった。/（じゃ後で幸せになるの）そうです。/（どうして）ナンカこの男はアノこの女のためにナンカ
そのときはイチイチセンのドルもらったでしょ。/このお金はアノ…カバの絵で、ナンカ買う…じゃない。/例
えばこのカバの絵は5千円の価値しかないけど、アノ1千円に出してこのお金はナンカ募集…募集じゃない…
ナンカ貧乏の人に預けるのは女のは感動して、もう一度二人は幸せです。/